

# 編集室

\* 今回、「進化する先端フォトニックデバイス」という特集を組ませて頂いた。この特集は 87 ページ という大部なもので、16名の第一線で御活躍の先生方に解説記事を書いて頂いた。皆様、大変お忙しい先生方ばかりで、貴重な時間を割いて下さったことに厚く御礼申し上げたい。また、編集委員の諸氏にも大変御尽力頂いた。この場をお借りして御礼申し上げます。

\* さて、今回の特集の主題は、光エレクトロニクスにおける“量子力学”である。量子力学という大層難しそうな物理の分野があるということは、高校生のときに初めて聞いた人が多いと思う。私は大学に入学して、学部2年生のときに「量子化学」という講義名で、初めて量子力学に触れる機会を得た。「量子化学」という講義名が示すとおり、従来は原子、分子の中で起きる現象を説明する概念であった。しかし、それが、人間が作るデバイスの中で起きるようになったのだから、大したものである。「量子力学なんか本当に役に立つのか？」という議論も以前はよく聞かれたが、これが結構いい線に行っている。ポーア、シュレーディンガー、ハイゼンベルグら量子力学の草創期の巨人たちが、今日のエレクトロニクスの発展を見れば、どういう感想を持ってくれるだろうか。

\* 今後、エレクトロニクスの世界は、ますます“材料”固有の議論から量子力学に代表されるような“概念”を中心に据えた議論に展開していきそうな気配である。

(前編集特別幹事 平川一彦)

---

\* 関係各位にはごあいさつが誠に遅れましたが、今年度よりWG・Dの編集特別幹事を拝命しました。本学会の編集関係の仕事にはかかわったことがなかったので、いきなりの幹事というのは重責で、多少チャレンジングかと思いましたが、編集委員の皆さんや事務局の担当者、前任者など周りの方々に助けられ(御迷惑をかけつつ?)、今のところ、立ち上がりは順調という感じではあります。

\* 学会の編集関係の仕事という意味では、かれこれ10年以上前に、ある学会の編集委員となり、学会誌の特集以外の記事群全般を見る副委員長を務めたことがあります。本学

会に比べれば、専門の範囲も狭く、会員数もけたが違う規模でしたが、その分コミュニティとしての結び付きが濃く、記事の内容も読者の興味が集中しているだけに選択はしやすかった(が、実際には執筆者を探すのは大変)という状況でした。今では私の業種が変わり、研究面ではその学会に余り関係がありませんが、時には気分を変えて学会誌を読んでも面白記事に当たることがあります。

\* そのときの編集の経験を今の状況に反映してみますと、本学会のカバーする範囲はどんどん広がっており、学会のメンバーすべてが興味を持つ特集テーマなどの設定が難しくなっている状況下で、どのようなアクションを起こすか、大事な時期にさしかかっているのかもしれないという気がしています。各ソサイエティの機関紙・ジャーナルの内容も充実してきており、専門分野の話題を掘り下げる記事はそちらに譲るとなると、学会誌の方は境界領域の議論や電子情報通信にかかわる人が知っておくべき一般的な情報、入門的な記事に偏っていき、読者が興味のある記事に“当たる”のは確率の問題になってしまう懸念があります。

\* そうしますと、学会誌はどのような記事を載せていくべきか、ということになります。これに対する一つのアイデアは、まだ領域がどこなのか固まっていない、未来の技術予測や技術進展の方向性について提案していくものを毎号必ず掲載していくということかと思えます。未来がどうなっていくかは技術的な専門にかかわらず、読者の多くが興味のあるところかと思えます。もしくは、過去の様子もあり得ます。IEEE Computerには“32&16 Years Ago”という32年並びに16年前の当月号から記事を抜粋したコラムがあり、これは同じ効果をねらっているのではないのでしょうか。

\* さて編集の仕事にかかわると、その期間に担当した特集記事などには思い入れが残りますが、退任してしまった後はどうだろうかと、今から考えています。以前、編集にかかわっていた学会誌の場合、ちょうど学会誌のサイズを変更する時期だったので、本学会誌で会告・通知にあたる部分のデザインをその時点に一新すべく、担当させて頂きました。今でもそのデザインのまま掲載されており、これはささやかながら自分の仕事という実感が、今でもあります。今回もそのようなささやかな“跡”をどこかに残せればと思っています。

(編集特別幹事 荒川賢一)